

モンテッソーリ・メソッドにおける A.M.マッケローニの幼児・児童を対象とした音楽指導法 —*Music Book: Melody*の検討を中心に—

藤 尾 かの子
(エリザベト音楽大学)

**Musical Teaching Method for Preschool- and Elementary School-aged Children in A. M. Maccheroni's
Montessori Method: Focusing on *Music Book: Melody***

Kanoko FUJIO

Abstract

A.M. Maccheroni developed a music education approach for preschool- and elementary school-aged children using the Montessori Method. To clarify the tenets of Maccheroni's musical teaching method, we focus on her *Music Book*. The *Music Book* consists of 6 volumes; in this study, we start by analyzing *Music Book: Melody* (Vol. 5), intended for children over 5 years old. As a result of our study, the following becomes clear ; 1) *Music Book: Melody* (Vol. 5) aims to increase children's capacity for music composition and appreciation, 2) *Music Book: Melody* (Vol. 5) builds on the techniques shown in earlier volumes. In other words, children acquire the learning contents through repetition.

1 研究の背景と目的

A.M.マッケローニ (Anna Maria Maccheroni, 1876–1965) は、モンテッソーリ・メソッドが実践へと移行された1900年代初頭から、晩年の1950年代に至るまで、生涯を通してM.モンテッソーリ (Maria Montessori, 1870–1952) と共にモンテッソーリ・メソッド全体の考案と普及に携わった人物である。モンテッソーリは音楽の専門家ではなかったことから、音楽教育の開発は、モンテッソーリの思想を受け継いだマッケローニを主要とする人物らが寄与した¹⁾。マッケローニは、モンテッソーリ・メソッドを適用している幼稚園および小学校の教育現場において、長期にわたって音楽活動の実践を重ねながら、幼児および児童を対象とする音楽教育を考案した。そして、それらの教育内容を、おおよそ50冊の音楽指導書および著書として遺している。これらの中でも、本研究で焦点を当てる全6巻から成る *Music Book*²⁾ は、幼児期および児童期の音楽指導法が段階的に記されているため、マッケローニの音楽指導法を解明するために有用である。

マッケローニの一次史料を取り扱い、モンテッソーリ・メソッドにおける音楽教育に焦点を当てた包括的な先行研究としては、Miller (1981)³⁾ が挙げられる。しかし、Miller (1981) は、マッケローニの全史料を取り扱っていないことから、彼女の音楽教育の全貌を明らかにしているとは言い難い。また、モンテッソーリとマッケローニの音楽教育観まで踏み込んで論じていない。したがって、モンテッソーリ・メソッドにおける音楽教育は、未だ明らかにされていないと言える。

筆者は、モンテッソーリ・メソッドにおける音楽指導法の展開を史的な視座から解明するという自身の研究テーマのもと、これまでに *Music Book* の第1巻から第4巻等の検討を行った。これらを通して、幼児

を対象とする音楽活動において基礎的な教具として導入されている「音感ベル」⁴指導法をはじめとし、歌唱指導法、リズム活動指導法、および、主に児童期の音楽教育において用いられる「トーンバー」⁵指導法を明らかにしてきた。本研究では、*Music Book*の中から、5歳以降を対象とする第5巻 *Melody*⁶に焦点を当て、活動内容、教具・教材配置等の視点からマッケローニの音楽指導法を考察する。そして、第1巻から第5巻に見られる、マッケローニの音楽指導法の系統性を明らかにすることを目的とする。

2 モンテッソーリ・メソッドにおける音楽教育の位置付け

(1) モンテッソーリ・メソッドの概説

モンテッソーリによって提唱された、教具を用いて自己教育を行うモンテッソーリ・メソッドは、新教育運動を象徴する教育方法の1つとして、20世紀初頭の教育界に大きな影響を与えた。モンテッソーリがこのような教育方法を考案するに至った背景として、彼女自身が初めは医師として、後に教育家として子どもと関わり続けたという点が挙げられる。彼女は子どもの自然な生命の発達を援助するという生物学的な発達観に立脚し、医学を含む多角的な分野からのアプローチを教育に適用した。具体的に述べると、モンテッソーリは教育の根幹に子どもの自発性を最重要とする視点を据え、子どもが自分の興味・関心に従いながら行う精神活動を重視したのである。

以上のような教育理念を中核として、モンテッソーリ・メソッドでは、子どもが教具を用いながら自分の力で自分自身を築き上げることが最大の教育目的とされている。これを適えるために、モンテッソーリ・メソッドを構成する分野として「日常生活」、「感覚」、「言語」、「数」が設定されており、それらに一貫して、個々の要素から全体へ、易しいものから徐々に難しいものへと導く、段階的な教授法が導入されている。

モンテッソーリ・メソッドが実践へと移行された1907年から現在に至るまで、音楽活動は、上述した4つの分野のうち、「感覚」分野を基盤としていることに変化はない。「感覚」分野では、五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）の1つに焦点化して、色彩や音高等の要素が個々に具現化された教具からその要素を受け取らせ、それらを秩序立てていくように導く。その後、その要素に一致する名称を提示する方法が採用されている。

(2) モンテッソーリ・メソッドにおける音楽教育の位置付け

先述したように、モンテッソーリ・メソッドにおける音楽教育の大部分は、モンテッソーリの依頼により、マッケローニを主要とする人物らによって考案・発展された。したがって、音楽教育開発におけるモンテッソーリの立場は全体の基礎を築き、その方向づけを行い、指導的役割を果たしていたと解釈できる。とはいえ、モンテッソーリ自身も、メソッド開始時から著書や講義録において音楽教育に関する論述を遺している。

モンテッソーリの著書の中でも、とりわけ音楽教育に関する記述が際立っている4冊として、① *il metodo della pedagogia scientifica applicato all'educazione infantile nelle case dei bambini* (1909)、② *Dr. Montessori's own handbook* (1914)、③ *L'autoeducazione: nelle scuole elementari* (1916)、④ *The Discovery of the Child* (1948) が挙げられる。これらの中でも、メソッド開始時からおよそ10年後に出版された *L'autoeducazione* は、幼児期のみならず児童期の音楽教育についても触れられており、モンテッソーリとマッケローニが音楽教育をいかに位置付けていたかを捉えることに有用である⁷。したがって、本著を検討することは、後にマッケローニらによって発展された音楽教育全体を見ていくためにも必須事項であろう。

本著において、モンテッソーリは、「(幼児期に) 音楽的な耳を育成するためのトレーニングを受けていない人は、いくら素晴らしい音楽を聴いたとしても、その人の鑑賞能力の範囲内でしかその音楽を知覚したり理解したりすることができない。」(Montessori 1917, p.364) と述べ、音楽教育の基盤に、音楽的な良い耳の育成を据えた。ここには、幼児期にあらゆる感覚の基礎が築かれるという、「感覚」分野に貫く理念が通底している。そして、モンテッソーリは、幼児期の音楽教育において「音を注意深く聴く」ことを出発点とする活動を導入したのである。具体的には、①静けさを体感する「静粛の練習」、②音量感覚の育成のための「雑音筒」、③音高感覚の育成のための「音感ベル」、④「記譜」・「読譜」、⑤リズム感覚の育成の

ための「リズム活動」, という5つである。一方, 児童期の音楽教育では, ①移調を学ぶ「トーンバー」, ②「音楽理論」, ③「音楽鑑賞」, ④「作曲」という4つの活動が含まれる。

以上のように, 幼児期における音楽教育では, どのような音でも聴き取ることのできる耳と, 正確な音高感覚の育成が極めて重要であると考えられていた。そして児童期では, それらを基盤として, 音楽理論に沿った音楽鑑賞や創作活動を行うことが目指されていた。

3. マッケローニの音楽教育論

ここまで述べてきた音楽活動の内容と方法を綿密に考案し, 発展させたのがマッケローニである。マッケローニは, 幼児期の子どもと音楽の関係について次のように述べている。「全ての子どもが音楽に興味を示すわけではない。そのような子ども達にとって, 自分が学ぶ場に音楽的な学習環境が設定されていることや, 他の子どもが自発的に音楽活動に取り組む姿を見たり聴いたりすることは, 早急に教育的な効果が表れるわけではなくとも, 間接的に良い影響を与える。彼らが音楽に興味を持ち, 自発的に音楽活動を進めていくときがやってくるのは, 自ら音楽に関する非常に重要な事実を理解した時である。」(Maccheroni nd-b, p.42) この記述から, モンテッソーリの教育思想の根底に流れる, 子どもの自発性の尊重, および活動を選択する自由を重要視するという理念は, マッケローニの音楽教育理念の根源的な基盤となっていることが分かる。

以上の理念を中核として, マッケローニの音楽教育では, 「静粛の練習」, 「音高及び音価の識別」, 「歌唱」, 「読譜・記譜」, 「音楽理論」, 「リズム活動」, 「音楽鑑賞」, 「作曲」が行われる。これらの基礎には, モンテッソーリが提唱した, 「静粛の練習」や「音感ベル」の活動がそのまま残っており, 重要な位置付けがなされている。ただし, モンテッソーリは感覚と音楽の合一による教育を通して, 幼児期の子どもに良い耳と正確な音高感覚を培わせることを最も重要視していたのに対し, マッケローニはそれらを基盤としながらも, 音楽的要素を細分化して概念化させる理論的学習や, 記譜・読譜指導を徹底して行った。このマッケローニの意図は, これらの学習を通して習得された音楽的概念や記譜・読譜力をもとに, 将来的に子どもが独自の音楽を生み出すことや, 作曲家の意図を汲みながら音楽鑑賞をする能力を培うことにあった (Maccheroni nd-b, pp.41-42)。

4 Music Book: Melodyに見られる音楽指導法

(1) Music Book: Melodyについて

音楽指導書 *Music Book* の第5巻に位置する *Melody* が刊行される背景には, マッケローニが観察した, メロディーを聴く子どもの姿があった。これについて, 彼女は「幼児期の子どもは, 自分の感覚を用いてすでに習得している音楽的要素を観察する機会が与えられると, メロディーを構造的に捉えようとする。例えば, 子ども自らメロディーの終止形を聴き分ける。この体験をもとに, 子どもは次第にメロディーを部分へと分けることに興味を持つ。」(Maccheroni nd-b, p.36) と述べている。このような考えをもとに, 5歳以降の子どもが, 打楽器や「トーンバー」を用いながらメロディーの構成要素を多角的に学ぶ活動内容を考案したのであった (Maccheroni nd-b, p.39)。

マッケローニの定義するメロディーは, 3つの基本的な音楽的要素から構成されており, それはすなわち, 音高, 音価, 楽曲の構成である (Maccheroni nd-b, p.37)。 *Melody* に示されている活動は, これら各々の音楽的要素をさらに細分化した音楽的要素の学習を基礎として, 提示されたメロディーの構成理解および表情の解釈, 最終的には作曲へと発展していく。

(2) Music Book: Melodyの全体構成と活動内容

では次に, *Melody* の全体の構成を見ていこう。活動項目は, ①小節のアクセント, ②様々な小節の音階, ③休止または終止形, ④メロディー, ⑤休止の感覚, ⑥短いメロディーの構成, ⑦メロディーのサウンド, ⑧アクセントの付く小節, ⑨音の意味, ⑩2つの例, ⑪エクササイズ, と示されている。これらの各々の項目に含まれている活動内容と教材は, 表1に示すとおりである。

表 1 Music Book: Melody の活動内容と教材

| 活動項目 | 活動内容 | 教材 |
|-------------|---|--|
| ①小節のアクセント | ①教師がドラムを用いてアクセントが付いている拍を叩く。子どもはアクセントを耳で感じながら、同じようにドラムまたはトライアングルを用いて拍を叩く、または歌う。②子どもがリズム譜を読んだ後、アクセントを意識しながらそれをドラムで叩く、または歌う。 | ・2拍子(2/4, 6/8)のリズム譜 ・3拍子(3/4, 9/8)のリズム譜 ・4拍子(4/4, 12/8)のリズム譜 |
| ②様々な小節の音階 | 2拍子, 3拍子, および4拍子で示されている Cdur の音階の中から, 好きな音階を選択して歌う。 | Cdur の音階: 2拍子(2/4), 3拍子(6/8), および4拍子(4/4) |
| ③休止または終止形 | 2/4 および 6/8 拍子に示された様々なリズムパターンを叩き, フレーズを捉える。 | 2/4 および 6/8 のリズムパターン |
| ④メロディー | ・メロディーをフレーズに分ける。 ・アウフタクトの概念とその表記法を学ぶ。 | ・アウフタクトのメロディー ・繰り返しのあるメロディー |
| ⑤休止の感覚 | 短いメロディーの終止形を聴き分ける。 | ・完全終止のメロディー ・半終止のメロディー |
| ⑥短いメロディーの構成 | ・演奏する, または歌うことによって, フレーズを観察する。 ・強弱を付ける場所を考える。 ・完全終止または半終止を観察する。 | ・Haydn の楽曲 |
| ⑦メロディーのサウンド | ・完全終止と半終止を聴き分ける。 ・メロディーの調性を判断する。 ・トニック等, 和音の機能を聴き分ける。 ・メロディーを部分に分ける。 | ・Mozart の楽曲 ・Schubert の楽曲 |
| ⑧アクセントの付く小節 | ①1つの音楽を4つの部分に分ける。それら各々の部分を比較し, 音楽に表情をつけるためにアクセントの付く位置を考える。②楽曲の調性を確認した後に, ドミナントとトニックの役割を確認する。 | ・Wagner の楽曲 |
| ⑨音の意味 | ①メロディーを聴いて, 調性を判断し, 表情を読み取る。例:「柔らかくて情熱的な雰囲気」②メロディーをフレーズごとに演奏, または歌い, 表情を作り出している部分を考える。 メロディーを聴いて情景を思い浮かべる。 | ・Chopin の楽曲 ・Strauss の楽曲 |
| ⑩2つの例 | ①装飾音の付いた本来のメロディーと, メロディーの骨格を比較することによって, 装飾音の音楽的效果を学ぶ。②アーティキュレーションおよびアクセント等の音楽的效果を考える。③音程のエネルギーの効果を考える。 メロディーの骨格が書かれている楽譜を読んだ後に, 本来のメロディーを聴く。作曲家の表現の意図を読み解く。 | ・《Jack and Jill》 ・Chopin の楽曲 |
| ⑪エクササイズ | ①提示されたメロディーの音高のみを変化させる。②音価のみを変化させる。 ①自分の好きなメロディーをもとに, その拍子を変化させ, メロディーを新たに考える。②それを記譜する。(拍子, アクセント記号等も書く。) ③自分の作ったメロディーをトーンバーまたはピアノで演奏する。もしくは歌う。 ※最終的に作曲を行う。 | ・短いメロディー |

Maccheroni nd-a. をもとに筆者作成。

表 1 に示す①から⑪の活動内容を整理すると, ①小節のアクセントは, 打楽器や声を用いた拍節感の育成と拍子の表記の習得, ②様々な拍子の音階は, 拍節感と調性感覚の強化, ③フレーズから⑦メロディーの音にかけては, 簡単なフレーズから始められ, 複雑なフレーズ (例えば, アウフタクトを含む) に進行する中で, 終止形 (例えば, 完全終止および半終止), および和音の機能の理解, ⑧アクセントの付く小節および⑨音の意味では, 音楽の表情のつけ方, ⑩2つの例では, 装飾音の理解とその表記の習得, および作曲家の表現の意図を読み解く, ⑪エクササイズでは, すでに習得した音楽的要素の概念を総合させて, 楽譜には書かれていない作曲家の意図を読み解くことや, 作曲へと至る。

以上の活動内容において, 「耳のトレーニング ear training」と呼ばれる指導法が用いられていることは, マッケローニの音楽指導法に一貫して見られる1つの特徴である。この「耳のトレーニング」とは, 音楽的要素を認識させるために, 視覚的な情報を一切用いず, 音を聴き, それに合わせて身体全体で動く, 歌う, あるいは「トーンバー」で演奏する等の方法を意味する (Maccheroni nd-b, p.41)。そして, その後, 五線譜等の視覚的な教材を用いて, それらの音楽的要素を概念化して捉えさせる (Maccheroni nd-b, p.40)。

さらに, 上述の活動過程の最終段階には, 作曲活動や「コンサート」⁸ と呼ばれるプログラムが導入され

ている。これは、子どもがすでに習得したあらゆる音楽的要素を相互に関連させながら作曲をすることや、要素に目を向けながら作曲家の意図を汲み取って音楽を聴く力の育成までを意図して設定されている。

5 総括

第5巻の *Melody* では、メロディーの形成を秩序づける、音の長短、強弱、拍、拍子、調性、終止形等の詳細にわたる音楽的要素の概念、および記譜・読譜力を総合させて、作曲や音楽鑑賞のための力を高めることまでが目ざされていた。ここで、第1巻の *The First Book* から第5巻の *Melody* にかけて見られるマッケローニの音楽指導法を整理していく。まず、第1巻の *The First Book* では、①幼児を対象とする「音感ベル」を用いて、Cdurの音階構成音を聴覚から捉える→②これらの音高に音名を一致させることによって音高の概念形成を行う→③Cdurの音階構成音を取り扱う記譜・読譜の学習へと至る、段階的な指導方法が示されている（藤尾 2015a, p.124）。その全ての基盤として、良い耳を培うという役割を担う、静粛体験が据えられていることは特筆すべき点である。第2巻の *Value of Notes* では、文字通り「音価」に焦点化している。ここでは、「歌う」および「動く」アプローチを用いながら様々な音価を体得させる→体得した音価の感覚に名称や音符を一致させ、音価の概念形成を行う→音高および音価に焦点化した記譜・読譜の強化と、それに伴う歌唱力の育成→作曲や音楽劇等の創作活動を行う力を身に付けることまでが目ざされている（藤尾 2015b, pp.186-187）。第3巻の *Major Scales* および第4巻の *Minor Scales* では、小学校課程で用いる「トーンバー」を使用して、長音階・短音階を構成する体験と連動し、移調の概念、調性感覚、それらに伴うソルフェージュ能力、および、より複雑な記譜・読譜力の育成までが目ざされている（藤尾 2016, p.269）。

第1巻から第5巻の全体を通して見ると、幼児期において感覚的に習得した音楽的要素を児童期の活動において理論的に理解するように構成されている。さらに、異なる活動においても、すでに学習した内容を繰り返し行わせることによって、子どもがそれを完全に習得するような仕組みになっている。これらのことから、マッケローニの考案した音楽指導法は系統性を踏まえていると言える。第6巻の検討は今後の課題としたい。

活動内容に関して述べると、音楽的要素の知識や、記譜・読譜力の育成が徹底されていることから、課題中心主義的な性質を有していることが明瞭に認められる。しかし、最終的には、個々の子どもが創作活動を行うことや、1つ1つの音楽作品が内包している固有の世界観を感じることを重視している。これらから、マッケローニは、子どもが音楽で十分に表現するためには、確かな理論を習得していることが必要不可欠であると考えていたと予測することができる。

ここまで述べてきたマッケローニの音楽指導法には、子どもを教育の中心に据えるモンテッソーリの理念や方法が導入されていることも見過ごすことはできない。具体的に言うと次の3点が挙げられる。1点目は、音楽活動そのものを行うかどうかは子どもに一任されており、活動を選択する自由が重視されていることである。この理念が存在しなければ、彼女の音楽指導法は、教師主導型であると誤解されてしまうであろう。2点目は、要素から全体へ、易しいものから徐々に難しいものへというモンテッソーリ・メソッドの基本路線の継承が窺えることである。3点目は、音楽理論の学習形態は硬直した知識としてではなく、体験的に理解させる方法を用いていることである。

以上から、マッケローニの音楽指導法で、音楽的要素を細分化させた学習の意味を述べるならば、音高や音価の感覚、さらには調性感覚を含む音楽的感覚の獲得と記譜・読譜力の習得、それを土台とした作曲能力および音楽鑑賞能力の育成と強化にあったと言えるだろう。

注

- 1) モンテッソーリ・メソッドにおける音楽教育成立には、E.B.バーネット (Elise Braun Barnett, 1904-1994) の存在も看過できない。モンテッソーリから依頼を受けたバーネットは、1923年以降からリズム活動や音楽理論学習の考案に着手した。このリズム活動は、特徴的なリズム・自然な表現・単純性、という3つのキーワードのもと、30カ国の民謡と14名の著名な作曲家の作品から構成されている。

- 2) 正確な刊行年は不明であるが、1950年代にマッケローニによって著された、幼児期から児童期の子どもを対象とした音楽指導書である。各々のタイトルは、1. *First Book*, 2. *Value of Notes*, 3. *Major Scales*, 4. *Minor Scales*, 5. *Melody*, 6. *A Musical Reader*, と示されている。
- 3) Miller は、モンテッソーリ教育を実践している教育現場での自身の経験及びマッケローニらの史料をもとに、子どもが作曲する能力を身に付けることまでを含む、独自の音楽カリキュラムを提案している。
- 4) 「音感ベル」は、C4を基点として、1オクターヴの音域を含む。子どもが操作するためのセットと活動の確認を行うために使用される同一のセットの2つが、組になって準備されている。これらの外見上、全てが同一の形状という特徴を持つため、子どもは聴覚だけを頼りにして活動を行うことが求められる。
- 5) 「トーンバー」は、「音感ベル」の発展的な教具として位置付けられている教具である。「音感ベル」と比較して取り扱う音域が幅広く、C4を基点として2オクターヴ先のC6までの音が鳴る。このような教具の特性を生かして、「トーンバー」を用いる活動では、あらゆる音階を構成することを通して、音階の構造について理解を深めていくことが目ざされている。
- 6) 第5巻 *Melody* の対象年齢は明記されていないが、本指導書では「トーンバー」を主要な楽器として取り扱うと記されていることや (Maccheroni nd-b, p.39), 「トーンバー」の発展的な活動内容が示されていることから、5歳以降の幼児・児童を対象としていることが読み取ることができる。
- 7) 本著作は、モンテッソーリの音楽教育論や、マッケローニと共に考案した幼稚園から小学校課程における音楽教育実践について記されている。モンテッソーリ自身、メソッド開始時と比較してかなり発展した音楽教育の内容が示されていると述べている (Montessori 1917, p.319)。
- 8) 「コンサート」では、気分や雰囲気、動物等を描写した標題音楽の役割を担っている楽曲を取り扱う。子どもが曲を聴くまで楽曲に関する情報を与えず、鑑賞後に子どもが自発的に発する言葉を中心として鑑賞内容を深めていく (Maccheroni nd-b, pp.42-43)。

引用・参考文献

- Barnett, Elise Braun. (1973). *Montessori Music: Rhythmic Activities for Young Children*, New York: Schocken Books.
 (バーネット, ブラウン/ボーン, フランス・桑村清子(訳) (1981). 『モンテッソーリ音楽: 3才~8才の子供のためのリズム曲集』エンデルレ社.)
- 藤尾かの子 (2015a) 「モンテッソーリ教育における A.M.マッケローニの音楽指導法に関する研究—*Music Book: The First Book* の検討を通して—」『音楽学習研究』第10巻, pp119-126.
- 藤尾かの子 (2015b) 「モンテッソーリ教育における A.M.マッケローニの音楽指導法に関する研究—*Music Book: Value of Notes* の検討を通して—」『教育学研究紀要 (CD-ROM 版) 中国四教育学会』第60巻, pp.182-187.
- 藤尾かの子 (2016) 「A.M.マッケローニの音楽指導法に関する研究—*Music Book: Major Scales* および *Minor Scales* の検討を通して—」『教育学研究紀要 (CD-ROM 版) 中国四教育学会』第61巻, pp.264-269.
- Maccheroni, Anna Maria. (nd-a). *Music Book: Melody*. np.
- Maccheroni, Anna Maria. (nd-b). *The Montessori music book*. Battersea: Salesian Press.
- Miller, Jean Karen. (1981). “The Montessori Music Curriculum for Children up to Six Years of Age.” Ph.D. dissertation, Case Western Reserve University.
- Montessori, Maria. (1909). *il metodo della pedagogia scientifica applicato all’ educazione infantile nelle case dei bambini*. Rome: Max Bretschneider.
- Montessori, Maria. (1914). *Dr. Montessori’s own handbook*. New York: Frederick A. Stokes company.
- Montessori, Maria. (1917). *The Advanced Montessori Method: the Montessori elementary material*. Trans.by Arthur Livingston, New York: Frederick A Stokes Company. (Montessori, Maria. (1916). *L’autoeducazione: nelle Scuole Elementari*, Roma: P. Maglione & C. Strini.)
- Montessori, Maria. (2014). *La Scoperta del Bambino*, Milano: Garzanti. (Montessori, Maria. (1948). *The Discovery of the Child*, Trans.by M.A. Johnstone Madras: Kalakshetra Publications.)